



# 尾崎紅葉集

杉浦非水裝幀

改造社  
版

大正十五年十二月一日印刷  
大正十五年十二月三日發行

現代日本文學全集 第六編

著者 尾崎紅葉

發行者 山本美

印刷者 杉山愛二



發兌

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

改造社

振替 東京八四〇二番  
電話 銀座四五一七三番  
銀座一七三番

# 「尾崎紅葉集」目次

卷頭 寫眞 (兼影——原稿、書簡)  
照影——時時、稿中

尾崎紅葉小傳

多情多恨……………一

二人女房……………一三五

二人色懺悔……………一八六

巴波川……………二〇八

戀の蛻……………二二五

やまと昭君……………二三七

拈華微笑……………二四六

紫……………二五五

胸算用……………二五八

## 小品及隨筆

大鼻毛……………二九二

湯の花……………二九七

はやりの紋……………二九八

末黒の薄……………二九八

正月八景……………三〇〇

風づくし……………三〇一

## 書翰

小栗半左衛門氏へ……………三〇三

小栗風葉氏へ……………三〇三

杉野喜精氏へ……………三〇四

病骨録……………三〇六

著作年表

## 尾崎紅葉小傳

尾崎紅葉山人、名は徳太郎、慶應三年十二月十六日、江戸、芝仲門前に生れた。父は谷齋といひ、秀れた彫刻師であつた。早く母に別れ、祖父母の手によつておなじ神明町に育つ。小學ののち三田英學塾に學ぶ。幼よりして聰慧、文才は其の天稟である。明治十六年(十七歳)神田一ツ橋の大學豫備門に入り、明治二十年(二十一歳)帝國大學の法科に進み、一年にして文科に移る。在學一年。

是より先、大學豫備門にある頃、石橋思案、丸岡九華氏と相知り、共に「文友會」を興す。其の頃芝三條山に因んではじめは縁山と號した。明治十八年二月、山田美妙、石橋思案、丸岡九華氏等と共に、九段中坂上に「硯友社」の大師を齎した。聲に應じて、香夢樓、岡田虛心、川上眉山、巖谷小波、江見水庵、後に大橋乙羽、廣津柳浪氏などが、加盟した。人の知る「我輩多文庫」の創刊は實に同年五月である。はじめは山人と美妙兩家の筆寫に係る半紙半葉十數葉綴ちの小冊を同人間にて巡覽したものである。山人の作「江島土産貝屏風」はその初號より連載されたが紀行體のもの

で、小説の處女作と見らるべきは、同誌第九號に掲げた「謠紫怨氣針卷」であつた。「我樂多文庫」の初號より、山人は雅俗折衷體を創造して、「風流京人形」を連載し、次第に文名が揚つた。

明治二十二年(二十三歲)一月、故理學士吉岡哲太郎氏の經營した吉岡書籍店から發行した「新著百種」の第一編として「山人色懺悔」を公にした。是ぞ山人が最初の單行本で、開卷第一頁序文よりして、其の文章は、日本文壇に、全く山人が獨創した名文名作にして、世に一躍文壇の覇を稱するに至つたのである。

明治二十二年十二月、高田早苗氏の紹介で、讀賣新聞社に入社した。爾來「伽羅枕」「夏瘦」より續いて、「多情多恨」「金色夜叉」に到る、多く同新聞に執筆したものである。且つ、本書所載の「二人女房」は雑誌「都の花」に連載した、山人がはじめて其の苦心に成る言文一致體の試練であつて、此の口語體の語尾に(である)を用ゐて一世に範を示したのは、また山人の創意である。

明治二十四年(二十五歲)十月、樺島菊子と婚を結ぶ。

山人は創作の傍、師となり、父となり、親

分となつて、門弟を養つた。門葉實に二十餘名、泉鏡花、小栗風葉、柳川春葉、徳田秋聲の四子の如き紅葉門下の四天王とさへ言はれたのである。

明治三十二年(三十三歲)頃より年壯なるに健康漸く勝れず、同三十四年(三十五歲)頃には、激く胃腸を悩み、當時讀賣新聞に連載中の「金色夜叉」も、休戦の續く日が多くなつた。翌三十五年夏、遂に讀賣新聞社を辭し、十月二十六新報に入つたが、健康ふたたび舊の如くならず、同三十六年二月、大學病院で入澤博士により、あゝ、遂に胃癌の診斷を受けた。三月退院して、療養に努めたが、七月に入り病勢漸く進み、十月三十日夜十一時……年を享くる僅に三十七。

十二月二日青山の墓地に葬る。彩文院紅葉日崇居士。會葬する者二千人に及ぶ。辭世の句は「死なば秋露のひめ聞ぞ面白き」である。

夫人菊子との間に、二男三女がある。長男弓之助氏は生後僅に四五日にして夭し、「乳すてにあれば」臘の月夜かな「夫人と、哀惜の句、人を泣かしむるものがある。二男夏彦氏家を繼ぎ(今年二十六歲)現に帝國大學の文科美術史料に在り。長女藤枝子は、大正十三年十一月

三十一歳にて逝く。二女彌生子は海軍造兵少佐杉山金作氏に嫁ぎ、一男三女、三女三千代子は、海軍主計少佐横尾石夫氏に嫁ぎ、同じく一男三女を擧ぐ。家門の彌榮えに榮え行くのは、これまた山人が生前積徳のいたすところである。

○  
紅葉

春  
ほのくと鶴を夢みて明の春  
春の日の巡禮蝶に似たるかな  
曉の篇替へて來た秋かな

夏  
青嵐尾上の鐘を繞りけり  
人訪へば梅干して居る内儀哉  
蚊帳の月美人の膝を閑却す

秋  
星既に秋の眼を開きけり  
二三里の妹許行くや露の中  
芋蟲の雨を聴き居る葉裏哉

冬

年木樵る黄金の斧の切味よ  
常綺羅や鯛味噌や市に小柴垣  
誰が見てや木葉挟みし山家集

# 多情多恨 (前編)

一

驚見柳之助は其妻を亡つてはや二七日にな  
る。さる者は日に疎しであるが、彼は此十四日  
をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては  
今朝のやうに、唯の今のやうにも思ふ。餘り思  
ひ窮めては、未だ生きてゐるやうにも想つてゐ  
る。なるほど病の爲に敢無くはなつた、水のや  
うに冷えて、美しい目も固く瞑いだ、棺へも  
斂められたらば、葬送も出した、谷中の土に埋めて  
様の位牌になつて了つて、現在此に在るから  
は、假でもなければ、夢でもなく、確に死ぬだ  
に極つてゐる。如何にも其軀は葬られて、其  
形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸の内には、  
その可愛い可愛い妻の類子は顯然と生きてゐる  
のである。

柳之助は多く人を好かぬ、代には又多く人に  
好かれぬ性で、男では朋友の葉山誠哉、女で  
は妻の類子、此二人の外には世界に柳之助の好  
いたものは無い。彼は多くの人を好く代に、唯

此二人を好いたのであるから。その情の篤い  
ことは夥しいもので、實に見苦しいほど其妻  
には惚れてゐた。

一も妻、二も妻、三も四も五も類で無くては  
柳之助の夜は明けなかつた、彼の同僚は(妻が)  
先生と仇名を付けたほどで、妻は彼の命であつ  
たものを、彼は今その妻に死なれたのである。

然まで可愛がられた、大事がられた彼の妻  
は、決して然までに夫を思はなかつた。謂はゞ  
一通であつたけれども、柳之助は少しも不足  
に思はぬのみか、それが女子の性と信じてゐた  
のである。

例の同僚は嗤つた、驚見は全力を擧げて其妻  
に惚れてゐるのだと。其通り、(全力を擧げて)  
とは嘲弄でない、適評であつた。適評ではな  
い、事實であつた。

彼は今其妻に死別した。則ち彼は第二の  
生命を奪れたのである。一日生家へ行つて見え  
なくても、直に顔色を悪くして鬱々ほどの愛著  
は、一週間経てど、十日経てど、乃至は一月、

一箇年、十年が百年経たうとも、到底二度とは  
其妻を見られぬに極つた失望を忍ぶには餘  
る。さては是非前後も、分別も用捨も何も無  
く、一圖の悲歎に沈むで、泣くと悔むの外は殆  
ど世をも人をも身をも忘れた。我はない子供の  
やうに、(お前は何か死んだ、死ぬことはない  
ん。死ぬといふ法は無い。)と、死顔の被を取つ  
ては、棺の前に坐つては、墓標を揺つては、位  
牌を眺めては、寫眞を取出しては、聲こそ立て  
ぬが、心の中では悶え／＼絶叫した。

悔むで復らぬ事、悲むで復らぬ事ぐらゐは、  
柳之助も知つてゐる。復らぬ事を復さう爲に泣  
き悔みもするのではないが、或點まで泣き且悔  
むならば、随分復る事との信仰を以て、泣きも  
悔みもするのではあるまいか、と想はるゝほど  
柳之助は取亂したのである。

その狂哀も漸く失めて、今は眞摯に其死を  
悲む涙が催して来る。諦められぬ、諦めら  
れぬ、諦められぬが、定命と諦めねばなら  
ぬ——諦めて見た。諦めては見たものゝ、一  
旦生死の手を分つたからは、類は二度と再び  
此世には歸らぬ人、これから長い一生涯も  
う逢はれぬ、となつて見ると、その心細さ、味  
氣無さは居ても起つても堪へられぬ。此二三日

は全く生効の無い體になつて、唯二件の事を思窮めてばかりゐる。

一つは、可愛い可愛い妻の生前の事。二つには、此先何を樂に生きてゐやうと云ふ事、此の二件が渦になつて、間斷無しに柳之助の胸の内を回轉してゐる。甚麼に考へたところが此先の樂は無い、ばかりか、現在今日生きてゐる空も無いのである、と云つて、豈死なれもせぬ、と云つて、愁ひ生残つて物を思ふも愁い。思ふまいとしても、忘れやうとしても、寐れば夢を見る、起きてゐれば、唯其事が紛々と胸に集る。

「呸、酒でも飲もう！」

と柳之助は憤れたさうに目を瞑つて首を掉つたが、直に置火燵から身を伸して、床の間の喚鈴を鳴したまふ。内向に手枕をしてしふ。徐に階子を踏むで、物柔さうな四十恰好の婢が昇つて来て、

「御用でございますか。」

と座敷の紙門を啓けると、柳之助は俛いたままで、

「酒を一つ買つて来てくれ。」

その力無げに仆れてゐる體を老婢は怪むで、

「どうぞ爲さいましたか。」

と體を差入れる。

「可いから早く買つて来て。」

と彼はなほ顔

を挙げぬ。

「はい、はい。麥酒ならお内にございますが、やつぱり御酒の方が宜うございますか。」

「麥酒でも管はん、早く持つて来てくれ。」

老婢は慌忙しく下りて行く。その聲音と共に一陣の風は颯と栢を鳴して吹懸くる。時雨に北窓の障子は氣立ましい音をして條忽漢々瀾に

なるのを、柳之助は纔に首を擧げて見たが、又俯いて了ふ。

空は一面に微晦くなつて、雨は一時劇しく降出す。襟許から蕭々と惡寒くなるのに、火燵の火さへ消えかゝるので、横になつてもゐられず、物臭さうに起上つて、急に黯くなつた家の内を、何と云ふ事は無しに惘然眴してゐる。爾時老婢は顔色の圓盆に、鉢に鶏子を三つ容れて、醬油注に小皿、小蓋物に箸箱、コップ等を載せて片手には櫻田麥酒の栓を抜いたのを挈けて入つて来る。

「お火燵にお火はございますか。何だか又寒くなつて参りました。」

「あゝ、火を少し貰はうか。」

と其處に置いた盆を引寄せて、コップを把ると、恐多さうに老婢の酌をするのを、何と思つ

たか一寸見て柳之助は直に横を向く。それを見付けると、老婢は忽ち點々と涙を零した。

柳之助は又其を見つとコップを持つたまふ俯いて、滴々と涙を落す。老婢は壺を下に置くと、袂から鼻紙を出して、頻に泣き始めた。

柳之助はコップを半分ばかりを一息に嚙了けて、

「元、寂しいな。」と故と元氣よく言懸ければ、

「御尤でございます。」と元は益泣く。

此挨拶では不足らしく、

「あゝ、寂しいよ、寂しくて可かん。」

と重ねて訴へたが、急來る涙を防がう爲に、餘れる酒を又一息に呷と飲むで、

「もう一盃。」

此酌に就いて彼は考へたのである。お茶一つ上るのでも、奥様の御手からでなくば御承知の無かつた旦那様が、元のお酌で上るのみか、注げと有仰る。嗚呼御傷しい。例ならば

(類さん)を呼べと有仰るのであるけれど、その奥様は御在なさらない。お寂しいとは御尤だ、と老の泪はいと脆かつたが、やがて忙しく目を拭いて、涙を去むで、もう泣くまいと覺悟し

たやうに紙を袂に入れて了つて、  
「それに今日は姻家の奥様も御歸になつたものですから、急に猶の事お寂しうございます。」と盆の物を按排して、鶏子を割つて其へ出しながら、  
「何も御肴がございませんので。本當に御精進なのでございますけれど、姻家の奥様が其には及ばないと有仰つて、此間から旦那様だけに御魚や肉を差上げて居りますのですから、お鶏子も宜うございませう。」  
「あゝ、それぢや何か、姻家の家母様やお前は精進なのか。」  
「はい。」と老婢は又少し萎れる。  
「然うか。」と頭を掻いて、  
「些とも氣が着かなんだ。」  
「いゝえ、旦那様はお宜うございます。」  
「いや、俺も其ぢや精進にしやう。」  
「然うでござりますか。それはまあ何方かと申せば、御精進の方が。」  
「佛の爲だな。」  
「然やうでございますとも。」  
と其可憐さに老婢は又涙を誘はれる。  
「唉、もう佛に成つて了つた！」  
耐りかねて柳之助は水でも飲むやうに一盃の

麥酒を盡して、ほうと息を吐く。老婢は起つて火を持つて来て見ると、柳之助は目を閉ぢて、壁に靠れて、少しは酔つたやうな、多くは物を思ふやうな態で、蒼然としてゐる。  
元は火燵の始末をして、盆などを片寄せて、起たうとすると、主は弗と目を開いて、  
「何時かな。」  
その倚つてゐる壁に時計の掛けてあるのを老婢は見て、  
「四時七分前でございます。」  
「これから一寸墓詣に行つて來やうかな。」  
と柳之助は障子の硝子越しに外面を眺める。元是有繫に驚いた。如何な事でも一日に二度も墓詣をするものがあらうか。今日は二七日であるから、朝の内に谷中まで詣つて來たばかりである。それも近い所では無し、まして雨は降る、日は暮れる、これから如何なさうといふのか、と其氣色をば候つたが、随分出掛もしさうな様子。  
柳之助の身になつたらば、懐しい遺骸の眠つてゐる所は、目に見えぬ魂魄の猶留る屋棟の下よりは、追慕の隅を隣するに疑無い。彼の墓詣をせうと云ふのは、生きてゐる人を尋ねると同じ意で、懸しさに堪へかねたればこそ

である。  
「何う考へたらば、別に不思議は無い。老婢も然うとは考へたのであるが、極めて不思議に思つた、或は變に思つた、些と氣が如何かしたのではあるまいかと思つた、然う思ふと、何と無く可憐いやうな、心細いやうな、途方に晦れたが、左も右も留めるより外に法は無いと思案して、  
「もう今日はお遅うございますから、明朝にさいます。」  
「遅くても可いさ。」  
「それでも、今朝もう一度御詣をなすつたのぢやございせんか。那廬に一時に幾度も行らつしやらなくつても、日に一度づゝで繁々の方が却つて佛様は御喜びでございますよ。」  
「然うかな。」と柳之助は稍折れる。  
「これから御詣をなさいます代に、御佛前へいらして、御線香を多度お供ひ遊ばしました。」子供が言聞かされたやうに、柳之助は惜々と頷いた。墓詣は思止つた様子に、老婢は胸を安むじて、  
「私も御回向を致しますから、いらつしやいませ。」  
日暮に薄る空模様は雨の爲にいと晦くなつ

て、製造場の汽笛が曇つた聲で泣くやうに聞える。彼は曳入れられるやうに寂寥を感じて、噫、今夜も此寒い、陰氣な二階に燈火と相對で居なければならぬか。居られるものではないと思ふと、柳之助は我知れず衝と起つた。

起つた所、何處へ行くのである？ 此が自分の住居であれば、何處へ行つたとして、（類さん）は居ない。我家であれば、依然此に居るのだ、と座敷中を陶したが、如何しても居る氣が無い。起つて見ると、もう坐る氣も出ぬ。

例ならばラムプを持つて昇つて来る時分だ。晩飯の支度をするので、元と呼ぶ聲が聞える時分だ。ラムプを持つて來ぬ、元と呼ぶ聲もせぬ、叫ぶ、寂しい。と柳之助は堪へかねて、二間の座敷を往來してゐたが、其でも堪へかねて、竟に階子を下りた。

「元、元！」

と呼びながら玄關の方へ出る。老婢は臺所から駈けて來ると、

「傘を出してくれ。」

と言つたばかりで、焦躁しながら考事をし

てゐる眼色。元は前垂で濡手を拭き、

「何方へ行つしやいます。」

と其舉動を見てゐる。

「一寸其處まで。」と極めて胡亂に答へる。

「御出掛でございますか。唯今お線香を供げる」と有仰いましたのに、急に如何爲すつたのでございませう。」

恨めしさうに元に視られて、少し面目無かつたか、

「やつぱり一寸行つて來る、どうも氣が濟まんから。」

「御慕詣でございますか。」

柳之助は唯願いて座敷の内を例の運動してゐる、心では此慕參を異變なものと思ひながら、氣が濟まぬゆゑに行つても見たいのを、如何したものであらうと分別しかねてゐるらしく。

老婢は彌々氣味悪く思つて、之は飽くまでも出しては好くないと、氣に障らぬやうに種々と留めた。留められて見ると、有繋に其に理があるので、振返つてまでも出やうとは爲ぬけれども、又満足して思止ることも出來ぬので、益々烈しく座敷中を往きつ還りつしてゐる。

## 二

此時格子の外に人力車が駐つたので、柳之助は慌てゝ玄關に駈出ると、美しい蠟塗の車は軌を支いて、氣凜と雨具に身を固めた車夫が

背面になつて、前桐油を外してゐる。

車の音を聞いた時に、柳之助は不圖類さんが生家から歸つて來たのかと想つた。そこで駈出したのであるが、車を見ると、然で無いのを感じた。見覚えのある此車は友人の葉山誠哉。

あゝ、葉山が來てくれた、と嬉しいやうな、頼しいやうな、それにも胸が通つて、又涙が出る。

「おや、葉山様が入らつしやいました。好い所へまあ。」

と老婢は顔に喜ぶ。

葉山は霜降の厚羅紗の外套を着て、全然と頭巾を被つて、小豆色の爪革を掛けた新しい足駄で、細骨の蛇の目を繋げながら、

「あゝ酔い降だ。」と急いで格子の内に入る。

「此御天氣に好くまあ。」

と老婢は急遽起ちかゝつて外套を脱がせる。柳之助は愕然した顔の、氣の無い聲で、

「さあ上りたまへ。」

客と主は連立つて二階へ通る。迹には老婢が車夫に向つて類に愛想を言ふのが聞えた。

葉山は座敷へ入ると直に、

「おや、麥酒かい、洒落てゐるぢやないか。豪氣だね、火燈は。」

と衝と入つて、  
「あゝ寒い、寒い。」

と肩を揺る。

性来の無愛相が、憂に心を奪はれてゐる  
のであるから、柳之助の様子と云ふものは、無  
い！ 可厭な奴が來たと謂はぬばかりである。

けれども心の中はなかく嬉しいので、  
「此方へ來たまへな。」

と壁際の自分の席を指すと、

「何有、此で可い、其代一盃戴かうか。今日  
は御見舞に來たのだ、然うく、持つて來たも  
のがあつた。」

葉山は手を鳴して、

「車の中の包を。」と老婢に命じた。

元はやがて定紋付の萌黄絹の袱紗包と、重  
篤らしい包とを持つて來て、葉山の前に差置い  
て起たうとするのを、

「一寸待つて下さい。」と袱紗の包を解いて、  
「之を御佛前へ。」

西洋林檎を一籠と蒸菓子が一折、鳩居堂の線  
香を一箱添へて、蒔絵の盆に載せたまゝ其へ出  
す。

「おやまあ、御見事な、まあ。」

と元は急に手も出さずに眺めてゐたが、  
「旦那様、御覽遊ばしまし。」

と其方へ差向ければ、柳之助は頷いたばかり。  
物馴れた老婢は主人に成代つて百方禮を述べ  
て、

「どれ、御覽に入れて参りませう。」

と立ちかければ、

「それから未だお重だ。これは御茶です。何か  
旨い物を持つて來やうと思つたけれど、此際の  
事だから遠慮をして、椎茸、干鰯の類き。尤  
も代物は精進だけれど、少しは陰に如何様がし  
てあるかも知れませんよ。」

と笑ひながら包ごと元の方に推進る。

「それは、まあ何から何まで、難有う存じます。  
お蔭様で私も大助りでございます。旦那様、又  
お重を戴きました。」

「それは難有う。」

と柳之助はやうく禮を言ふ。

葉山は手箱を引寄せて、葉巻の細巻を吃した  
がら、柳之助の又思出してか、俯いてゐるのを  
じろり／＼と視て、何と慰めたものであらうと  
思案をしてゐると、柳之助は左の袂から手巾  
を一握出した。而して隅の方へ投遣ると、其が  
三つになつて轉がる。今度は右から又二つ引張  
出した。それをも投出してつて、袖で目を淨  
る。

葉山は驚いて見てゐたが、

「何だ、あの手巾は？」

「どうも涙が出て困る。」

「那是悉皆濡れてゐるのかい、なるほど險が唾  
太くなつて、太く目が赤いと思つた。さあ之を  
貸さう。」と綾絹の白の手巾を火燵の上に  
出せば、芬と香水が匂ふ。

「好い香がするね。妻が能く言つたつけ、君が  
來ると好い香がするって。」

「否味だと言つたのだらう。」

「君も知つとるけれど、妻は決して惡口を言は  
んかつたよ。特に君に對しちや、何だ、非常に  
信用して居つたから。」

生前でさへ妻の事を説く柳之助である、まし  
て今日では、其噂を始めたら底止はあるまい。

其は可いが、餘り思はせて泣かせるのは健康の  
爲に好くない、故に慰籍に來たのと思へば、葉  
山は故と語頭を轉じて、

「時に。」と言出した。

柳之助の胸の内は、はや妻の事に就いて萬感  
が満ちてゐるので、何から話出して可いやら、  
それにのみ氣を奪られて、他の言は、耳にも入  
らぬ。

「實に慙云ふ時に妻が居つたら御馳走をするの  
が、

だけれど、居らん、妻は居らん。」

と好い香のする手巾を把つて、柳之助はさしぐむ涙を拭ふ。

「然しね。」と葉山は又言出すと、

「然し、居らんやうな心地はせんよ、死んだとは思はれんよ。」

「それは尤だ。然し……。」

「何故死んだかと思ふと、妻は實際僕を愛して居らんかつたかと思ふよ。」

「那麼無理な事があるものか。」

「あゝ、それは無理かも知れぬ、無理だらう、無理だつた、全く無理だつた。」

彼は最愛の妻の氣に障つた事を不圖言つて、その不機嫌を見て、遽に執成すやうに、詫でもするやうに、頻に斷つた、罔より無理などを言ふ意ではなかつた、思餘つて不知口走つたのであるが、無理と尤められて見れば、無理であることと心着いたので、すると、(類さん)の婉然とした面影が胸に浮むのである。最愛の妻の面影は始終眼前には隠顯てゐるが、それが忽ち不興の眼色をして怨めしさうに視たのである。

柳之助は濟まぬと思つた、無理である、と頻に詫びた。けれども心が落着かぬ、即ち幻の面影は其色を釋かぬのである。耐りかねて柳

の助は、

「妻はね、妻は……。」

と言出したが、さて何と言つたものやら、有繋に惑つたのである。

「妻は君も能く言つたけれど、非常に客を喜んでね、僕とは違つて愛想が好かつた。」

とは言つたが、是では未だ其不興を釋くには足らぬと思つた。然し早速に言ふべき事が出なかつたので、姑く考へてゐたが、何を思出したか又涙ぐむで丁ふ。

「時に、君は學校の方は如何した？」と葉山は持扱つてゐた(時に)をやう／＼用立てる。

「學校？ 學校なんぞは管はん、もう否だ。」

苦い顔をして柳之助は頭を掉る。

驚見柳之助は大學の地質學專科を卒業して、今は東京物理學院の教授を勉めてゐるのであるが、謹勉であり、懇切であり、而も十分に實力のある所から、學院の氣承も生徒の信用も極めて好い、慇には試験の點が少し辛いと云ふ噂の外に、此人に對する非難の聲は全く無い。

學院では實に難有い大事の人になつてゐるのである。

「管はぬたつて、然うは行かないぢやないか、

自分の職業ぢやないか。餘り長く退いてゐたら、學校の方で差支へるだらう。」

「差支へても管はん。」

「那麼自棄を言つちや困るね。もう少し休むだらう方が可いよ、猶で引籠つて居るよりは却つて氣が舞れるから。」

「唉もう何を爲るもの否だ、何も出来は爲んよ、實際僕は生きると樂が無いのだ。生きて居らうとは思はんよ。」

葉山は手酌の麥酒を一口飲むで、

「困つたもんだ。」

と櫓の上へどつきりと靠れる。

「僕は實に寂しくて可かん。君、それは實に寂しいものだ。それに這麼雨の降る日などは、如何しやうかと思ふやうだ。何處へ行つても家中線香の氣がして、其が實に耐らんね。愚云ふ心地で一月も居つたら僕は屹と病氣をする、病氣をしても看病する者は無し、慰めてくれる者は無し、一日だつて僕は寐てゐられやせん。設然うなつたら如何せうかと思ふと、實に心細い。今でさへ這麼心地なのだから、あゝ否だ、否だ！」

惣毛堅つたやうに柳之助は身顫ひをする。

「那麼事迄考へた日には際限が無い。どうも今

「更爲方も無い、何と天命と思切れる外は無のだ。」

「僕は到底思切れんよ。」

「思切れんと云つたつて……」

「だつて、思切れんぢやないか、僕の身になつて見給へな。君は殘酷だ。」

「殘酷は過いね。君が何程思切れないと云つた所で、お類さん様が生返るぢやなからう。」

「ぢや思切つたら生返るか。」

「柳の助は急立つた氣色。」

「又那麼無理を言ふよ。君の心は十分察してゐるわね。けれども哀むで傷らずだよ。君は細君の爲に體を毀しても苦しくないのだね。」

返答に窮へてゐる間に葉山はコップの酒を飲盡して、更に一盃を注がうとすると、半分よりは無い。

「麥酒はもう無いかい。」

「無けりや買はう。」

と喉鈴を鳴して元に聞けば、幾許もあると、又一本口を抜いて来る。

「まあ一盃飲むで、もう那麼話は止さうよ。」

と葉山は一つ差した。

「他の話より此話が可いのだから、もっと爲てくれ給へ。」

「可けないよ。始終考へては鬱いでゐる所

へ持つて来て、又其話をしたら愈泣かせるのだ。不吉な話は止さう。」

「不吉とは？ 君……」

柳の助は口へ持つて行つたコップを控へて、屹となる。

「いや、惡かつた。私は今日は君が獨で寂しからうと思つて、見舞に來たのだ。然し一々言ふ事が君の感情を害すやうで、誠に濟まない。御迷惑だらうから私は是で御暇をする。」

身繕をして、葉山は起たうとする、其袖を柳の助は緊と捉へた。

「あゝ、惡かつた、僕が惡かつた。言過ぎたよ、免してくれ給へ。實際不吉に違無いのだ。」

苦に柳の助は詫びる。

「それぢや然云ふ話は止すかい。」

と未だ立膝をして羽織の紐を正してゐる。

「止す、止す。」

と片手に葉山の袂を捉へながら、慌てゝコップを空けて、

「さあ一盃、一盃飲むでくれたまへ。」と突

付ける。

此子供らしい所が葉山の柳の助に惚れてゐる所。彼が他の思はくをも管はず、直に妻がと言ふのも、不吉と言はれて、今腹を立つ

たのも、皆此子供らしきからである。

「那麼話は止すと云ふなら。」

と思がましくコップを受けて葉山は又火燈に入る。

「まあ居てくれたまへ。君に往かれて了ふと僕は孤獨だ。」

盃を差して置きながら、酌をするのは忘れて、指圓に顔を仰付けて柳の助は又鬱き出す。

愁ひ合手になつてゐたら、彌々思出させるばかりと、葉山は不如願弄して了ふ氣で、

「おい御酌は？」

「や、忘れた。」

と慌忙しく盃を取つて注ぐと、たたりと一零

ほど。兩個は思はず顔をみ合せ。

「何だ、盃が違つてゐるよ。」

柳の助は濟したもので盃を替へて酌をする。滾々と出る酒を見ながら葉山は少しく笑を帯びて、

「有る酒ならば悠うして出る、ねえ驚見。」

と泡を噴く酒と柳の助の顔を等分に見較べる。妙な事を言ふと思つて柳の助はおれの手の許を見い。葉山の顔を眺める。

「ねえ、無い酒は出ない、君は酒の無い邊で酌

をすることは出来ない」と云ふ事を知つてゐるぢ

やないか。」

「それが……？」

と柳之助は怪訝な顔をする。

「それがさ、無い酒も、亡い人も同じ事だらう。だから、餘り然う快々思はないが可い」と云ふのさ。」

と一口附けて、

「肴をくれたまへな、その鶯子を。君が手づから割つてくれるのさ。」

一つ取つて皿の縁へ抵てやうとして、柳之助は一寸控へた。

「何を考へてゐるのだ。」

「僕は今日から精進なんだからな。」

「君は精進でも、私が戴くのだから可からう。

然し精進は解つたが、今日からとは解せないね、今日からとは如何いふ理だ。」

「もう可いよ、可いよ。」

と一思に劈然と皿の縁へ打着ける。

「然うだ、然うだ。下地を注げて、あつ、那麼に注げて……如何するのだ。さあ、此方へ貸した。鶯子をもう一個……辛さうだから堪めるのさ。それから盆を、後が箸だ。」

葉山は之を楯の上で好いやうに鹽梅するのを、慨然と視てゐたが、

「君は好いな、一寸那麼事も上手にやる。僕

は全く出来んのだ。悉皆妻にしてみらつたのだ。その妻がもう居らんのだ。吓、困つたなあ。」

口頭に出したのは縁に如此耳であるが、胸の中には千萬無量の思が紛亂したので、彼は蒲團に頬を推着け、擦着けて悶えた。

葉山は餘りの様子に手を着かなくて、姑く黙つて視てゐると、柳之助は急に顔を舉げなかつた。いつまでも視てゐれば、いつまでも舉げぬので、

「其話は止す」と云つたぢやないか。」

それでも柳之助は仍顔を舉げぬ。

「さあ、もう好加減にしないかよ。」

と肩先を軽く附けば、やう／＼舉げた顔は、洗つたやうに涙に浸されてゐる。

「如何かならんかな。僕はもう耐らん、不愉快で。這麼不愉快な事は無い。如何しても慰められん不愉快だ。僕は今迄は甚麼不愉快な事があつても、妻の爲に慰められたのだ。僕は其妻を亡つて了つた。今朝墓詣をしたのだ。實に

君、夢だね、赤土の土饅頭に一本の墓標が立つとるばかりで、雨が寂しく降つとるのだ。君、之を見てくれたまへ。」

例の絹の手巾で半面を掩へながら、柳之助

は本箱の上にある雲州焼の小さな瓢形の一輪挿を指す。葉山は見た。染垂れた山茶花の半開が一輪横向になつて挿してある。

「君、是だよ。」

と柳之助は火燵から這出て、横向になつてゐるのを正面に正さうとしたが、枝が曲つてゐるので、如何しても外方へ振つて了ふ。花入の方でやう／＼鹽梅をして此方を向かせて、

「この山茶花だよ、好いだらう。」

何が好いのだか、葉山には少しも解らぬ。

「君、好いだらう、好いと言つてやつてくれ給へ。」

「又思出したのかい。」

因り果てた所爲事無しに葉山は麥酒を飲む。「妻は一體賑やかなのが好きだつたに、寂しい森の中で雨に降られて、唯一人埋まつとるぢやないか。僕は實に胸が一杯になつて如何すること

も出来んかつた。而すると、姻家の母がね、此花を見付けて僕に教へたのだ。垣の隅を見ると、此花が唯一朵咲いてゐるのだね、君、其木に唯一朵なのだよ。母が言ふには、是は類の魂だ。類の思が造つて花になつて咲いたのだ。類の大好の長椿には山茶花の模様が着いたつたから、是は類の魂に違無い、と言つて泣くのだ。僕

も見ると、丁度此方に向いて此花が咲いとるのだ。變な事を言ふやうだけれど、其時は此花が實際類の顔に見えたよ。風が来て動くのだ、類が薬を飲むのは否だと言つてね、首を撞つたやうだつた。僕は其時は妻が復活つたのかと想つた。考へて見れば妻は僕等の脚の下に埋まつたのだ、是は山茶花なのだ。妻の母は紙を出して、泣きながら此花を拭いとるのだ。何を爲るのかと聞いたら、君、親子だね……」

柳之助は咽返つて語が續かぬ。葉山は茫然酒を飲むのである。

「母親の言ふには、雨が灑つて冷たさうだから少し拭いてやる、と君、自分の濡れるのも知らずに熱心に拭いてやつとるぢやないか。而して此花を全然鼻紙で裹むで丁つた。那麽事をするものだから僕は猶悲しい、這處所に獨で置くのは可哀さうだから、内へ持つて行かうと言ふと、それぢや一緒に連れて行つてくれつてね、折つて僕に渡したのだ。君、此花だよ、あゝ、君の方を向いとるよ。」

柳之助は壁に頭を推當て、泣出した。餘り愚痴とは思ひながら、浸々哀に極口説かれて、葉山も誘はれ氣味の稍胸逼る。

「もう言はないが可い、いつまで言つたつて所

爲が無い。」

と鼻聲になつて顔を撫過す。

「言はしてくれたまへ。言はずに思つとるのはなほ不愉快だ。言つとれば多少氣が霽れるから。」

「それぢや此方が窮るよ。」

「君は窮つたつて、僕が窮つとるほど窮りはすまい。」

と柳之助は涙を拂つて問懸ける。

「然うどうも理窟を言はれちや困るね。」

「然し、君は僕が這處に思つとるのに、少しも僕を可哀だと思つてくれんのだ。君は平氣でゐるのだ。妻は君を兄のやうに思つとつたのに、君は類が亡くなつても、悲しいとも何とも思つてくれんのだ。君は然云ふ不實な人物とは思はんだつた。類の爲に眞實泣くものは、類の母親と僕と二人限だ。君は類の死んだのを悲しいと思つてくれんかね、僕は悲しい、這處悲しいことは覺えない。」

柳之助は嚔々と泣く。其體は如何にも可哀であるが、葉山は寧ろ首を傾けた。ちと逆上であるのではあるまいかと考へると、誘はれた涙は過つて、葉山は慄然としたのである。

「それぢや如何すれば可いのさ。もう其話は止

すと言つたから、私は歸るのを又居たのだ。然すりや又其話を始めて、舉句の果は私を攻撃するのだ。悪いことは言はない、然う思ひめてばかり居ては體が耐らないから、努めて氣の紛れるやうに工夫をしたまへ。第一内にばかり引込むのであるのが好くない、些と出掛けたまへ。」

「それが既に不實だ。死んだものは爲方が無いから、忘れて了へ、思ふなと云ふのは、殘酷ぢやないか、僕は死んだから思ふのだ。思つたから如何なる、泣いたから如何なるか、那麽卑劣な、目的などは有つとる理のものぢやない。君は僕より年長だし、經驗にも富むどるし、世間にも通じとるから、僕の考へてゐる所は或は僻してゐるだらう、君の社會的の目から見たら宛然子供だらう。君の言ふ所は世間の行ふ所なのだらう。君は世間を以て僕を責めるのだ。僕は世間を知らん、けれども幸ひに僕の心には世間と云ふものに曇せられん一片の誠がある。其誠がある爲に僕は忘れられんのだ。からして忘れられんのは、決して愧づべき事ではないと思ふ。」

「誰も愧づべき事だとも何とも言ひはしないよ。」

「言はんけれど君け愧づる方だらう。」

「えゝ、もう、何方でも宜しきやうに願ひませう。」

と言つた限で、其後は柳之助が何と言はうが、見向もせずに、くびりくゝと獨飲むのである。柳之助ははと思つて、

「君、腹を立つたのか。」

葉山は昂然として、

「あゝ腹を立つたよ。」

「僕は言過ぎたかね。」

「あゝ言過ぎたよ。」

「免してくれ給へ、ねえ。」

彼は無雜作に例の子供のやうに過を悔ゆる。

「宜い、君は僕を不實だと言ひました。」

「だから言過ぎたと言つて謝るのだ、免してくれ給へ。」

「君は成程細君は可愛けれど、朋友などの事は何とも思はないのだね。宜い、解つた。」

「那麼事があるものか、那麼事は無い。」

「それなら朋友の言ふ事も用ゐたが可いぢやないか。」

「無論用ゐるさ。」

「用ゐるね。蛇度用ゐるね。」

餘り念を推れるので、如何なる事かと柳之助は覺束なく思ひながら、

「用ゐる。用ゐる。」

と言ひは言つたが、さて何を言はれるか、と氣遣はしげに葉山の顔を見てゐる。

「外の事でもないがね、内にばかり引込むのであるのは好くないから、本當にちと出掛けたまへ。」

「どこへ？」

「まづ學校へ行くのは一番好いが……」

「未だ腦が亂れとるから、それは可かんよ。」

「それでは、僕の家へ來たまへ、遊びに来るのだ。御馳走するよ。出掛けた方が氣が舞れて甚麼に好いか知れやしない。氣も進まなからうけれど、まあ瞞されたと思つて來て見給へよ。屹と來るかい、宜いかい、來るね。」

柳之助は然と思案してゐる。

「如何したのさ。別に考へるほどの事は無からうぢやないか。内に引込むのであるよりは氣が舞れるよ。明日は休日で、私も一日内に居るから、朝から來たまへ。何を那麼に考へてゐるのだらう。」

太く考へてゐるのが葉山には解らなかつた。尤も何事にも直に考へるのが此人の癖ではあるが、己を信ずる唯一人の葉山の云ふ事は、常に自分の了簡よりも信ずるほどであるから、葉

山が右といへば右、左といへば左、つい應と言はぬことは無いのである。今日に限つて、何故か考へるにも當らぬ事を太く考へる。なるほど葉山には解らなかつた。

けれども、是は仔細も無い事で、例の細君の死を悲む餘、何を爲るのも氣が無いので、外へも出たくはないのであらう、と怎う判じたから、猶更勧めて、否應無しに引出さうと考へたのである。

利發の葉山も是ばかりは踏違へてゐた。なるほど柳之助は何を爲るのも愛いのである。外へ出る氣も無いのである。然し、彼はその最愛の妻を亡つた、女に於ける唯一人の所好を無くしたのであれば、此上は其心を慰むるには、男に於ける唯一人の所好を恃まねばならぬ、その葉山が深切に云ふ事をば、如何にしても背かう道理が無い。葉山が強ひて言ふならば、随分學校へも出るのである。掃憂とならば葉山と連立つて何處へでも行くのである。

然し、葉山の家へばかりは、柳之助の思案する理がある。それは自分と地下の類との他に知るものは無い。さすがの葉山も之を知らぬ。知らぬのではない、知らせぬのである。知らせぬのではない、知らせることが出来ぬのである。

知られては一大事なのである。

我家へ来いと切に勧めらるゝのは、恰も此知られては一大事と衝突したので、何事に直に考へる柳之助は、此際太く考へねばならぬのである。と云ふのは、柳之助は葉山の内眷が大の嫌で、彼は固より多数の人を蟲が好かぬその中でも、最も好いてゐる人の妻を最も好かぬのである。其好かぬと云ふに就ては、何等の原因も理由もない、其處が所謂蟲が好かぬので、自分の兄とも頼む人の内眷、其を好かぬではならぬと柳之助は常に考へる。それで、先方から己を疎みでもするのかと云へば、氣も無い、葉山同様に實を盡してくれる。其人をば何故に自分は嫌ふのか、と柳之助は始終心に訊ねて見るが、一向理由は無い。

葉山の内眷と云ふのは、美人ではないが、目鼻立の揃つた、色白の身材の纖削とした、閑雅な、奥様らしい様子の人物。若し其短所を挙げたらば、少し寂しくて、無人相で、何を爲るにも極めて不熱心のやうに見える。然かと云つて萬更義務でしてゐるとも見えぬが、進むで爲てゐるとは猶のこと見えぬ。萬事が機械的で、訥致といふものが無い。恰も其容貌の整つてゐながら何の趣も無いのと、能く一致してゐる。

る。

那云ふ女と能く添つて居られたものだ、と柳之助は常に思ふ。別して、(むづかしや)の葉山が能く彼で満足をしてゐると、其も亦一件の不審にしてゐる。

凡そ女子と云ふものは、柔に温であるべきものである。(類さん)は十分に柔に温であつた、と彼は信じてゐる。然るに葉山のお種は蠟石細工のやうに、硬くて冷たい。自分の最も好いてゐる者と正反對である爲に、蟲が好かぬのであるか、と柳之助は考へもした。

葉山には所謂焦れてゐるほどであるから、毎日でも逢ひたいのである。お種様を見なければならぬのが否さに、控へに控へて、三度行く所も一度にしてゐる。それでも一週に二度は缺かさず尋ねて行く。其通り随分足が近いから、氣の着く葉山でも此内秘ばかりは知らずにゐる。妻には限らず兩箇の居る所に他が來ると、氣先を折られたやうな調子で、柳之助は必ず慥るので、自分と(類さん)との外には打解けたことの無い男であるから、自分の外は内眷にも氣を置くものと葉山は考へて、可成妻をも近づけぬやうにしてゐる。

折々お種様が少し親しくかけると慥る。嫌

であるから慥るのであるが、葉山は然うとは知らぬから、此男の癖で、我妻も此人には他人であるとして、格別尤めもせぬのであるが、突んど知らむ、多くの他人よりも此お種様を彼は一倍好かぬのである。

常ならば柳之助も言はるゝまゝに出掛けるのである。今は此悲哀熱敷の心を枉げて、蟲の好かぬ人の所へ行かうとは思はなかつた。けれども葉山は常より熱心に誘ふ。因で柳之助は思案に晦れたのである。

段々責められて見ると、如何あつても否むべき理が無いので、進まぬながらも柳之助は承知をした。其を機に葉山は起たうとする、柳之助は如何しても還さぬ。切つて還ると言へば、泣き出しさうな顔をして寂しがる、其をば捨てて還るも氣毒さに、出た火燵へ又入る。又有問して又還ると言へば又引留める。葉山は慥はずに二度まで引留められた。三度四度と大概三十分毎に還らうとすれば、斟酌無しに柳之助は左右放さうとせぬ。到頭九時になる。此分では十時が十一時になつても放すまいと察たので、葉山は酒がもつと飲いたと言出した。柳之助は早速注文通り日本酒を取寄せて出すと、葉山は飲むでは差し、飲むでは差し、無性に差した。

「僕は然うは飲めんよ、迷惑するよ。到底君の敵手は出来んのだから……」

と後には柳之助も猪口を取らぬ様になると、  
「敵手が無くちや旨くないね。君も獨は寂しいと云つて、僕を引留めたらう。寂しいのは、君ばかりぢやない、獨酌も寂しい。君が敵手をしてくれなければもう御暇だ。」

葉山は直に起ちかけるので、然うは飲めぬながら、還られるのが否さに、受ける。知らず識らず酔が廻れば、體が怠くなつて、柳之助は其處に横仆になると、忽ち積日の疲勞が發して、前後不覺の高斟で、ぐつすりと寐入つて了ふ。

葉山も麥酒の下地に二合未滿も入れたから、大分酩酊の狀で、柳之助の寐入るのを呼びもせずに見てゐたが、竟に斟を搔始めたのを聞いて面白うに笑つた。

「やあ、頭盛潰して這つた。あゝ、能く寐た。寐るが好い。恁云ふ時は十分に寐て腦を休めるが何よりだ。」

葉山は火燵蒲團を剥いで、柳之助に被けて、「俺ぢや不足だらう。酔の假寐に何か被けて遣ると云ふのは、朋友の所作ぢやない、俺の爲る事ぢやないが、俺が爲なけりや外に爲るものは無い、噯、驚見。」

いや、成程腹減した！ 頬が減けて、目も窪むだ。思へば可哀さうなものだ。くの字狀になつて手枕をして、座敷の隅に轉つてゐる工合は、如何しても獨身者だ。細君が亡なつたら何と無く急に不潔なつたよ。可哀さうに、憂身を寢してゐる。」

這麼事を考へながら、葉山は悄然と火燵櫓に倚懸つてゐた。時雨は蕭々と、黒い風の隙洩るにつれて、身軀の出るほど寂寥は外から返つて来る。其中で老婢が沈むだ／＼聲して方便品を讀む。

「元は感心に回向をしてゐる。あゝ哀だ。旦那殿は高斟で寐てござる。實に老少不定だなあ！ 恁う酒などが出てゐると、細君が居ないとは思はれない。俺でさへ然う思ふのだから、驚見が寂しがるのも無理は無いか。」

細君巧くもないのに料理自慢だつて。俺の顔さへ見りや、飯を食つて行け、飯を食つて行けが病だつた。一度御世辭に茄子の鳴焼を賞めたら、それから毎歲茄子が出ると、鳴焼の御招待だつて。旦那殿が麒麟御使者に立つて、今日は君種々御馳走が出来よ、も罪が無くても可笑かつた。もう來年から彼鳴焼も食へないと思ふと、好い心地はしないものだ。いや未だ有つ

た、細君得意の早吸物——魚煎餅に湯汁昆布と云ふので、毎々奢らせたよ。當面今晚あたりは、何もございませんでと云ふので、例の金の網の青漆の櫓が出る所だ。あゝ又かと思ふやうだつたが、其人が居なくなつて見れば、不味い物も懐しい。果然、いや、果然、氣が着かなかつたが、今日は俺の(所好な)猪口が出てゐない。貴方は奇つてゐらつしやるからと云つて、變に歪むだ、踏潰したやうな、赤紫の氣障さ加減の耐らない猪口を出してくれたつて、是は貴方だと思つて弄謔半分に始終出した、彼奴が出てゐない。何だか勝手が違ふと思つた。一寸した事が既に恁うだ、驚見の寂しがるのは無理も無い。俺でさへ憶出すと好い心持はしない。」

葉山はほたりと膝に涙を零した。

「懇意にしたものゝ居なくなるのは、心細いものだ。俺も來ちや内のやうに我儘を言つたつて。昨日まで赤い手絡を掛けて大きな圓靨に結つて嬉しがつてゐた人は、もう佛様になつて了つたのかい。」

彼は目を連踏いて、涙を吸つた。

「どれ線香でも供げて、御暇としやうか。」

葉山は枕頭に近くあつたラムプを遠く離して、